

「科学をめぐるディスコース」にみる対話的構造： 携帯電話とたばこのディスコースの分析を通して

著者	出口 由美
雑誌名	仏語仏文学
巻	36
ページ	127-152
発行年	2010-03-15
URL	http://hdl.handle.net/10112/00017288

「科学をめぐるディスコース」にみる対話的構造 — 携帯電話とたばこのディスコースの分析を通して —

出口 由美

キーワード：ディスコース マスメディア 社会構成主義 対話性

1. はじめに

科学的な説明は、「伝統を超え、価値を超え、疑いを超えた真理として社会の中に行き渡り、わたしたちの生き方に深刻な影響を及ぼす」(Gergen, 1999=2004)。こうしてわたしたちは、「科学」とともに、この世の中を生きている。

本論文では、フランスのマスメディアにおける、「政治的な側面を帯びた科学技術についてのディスコース *Les discours scientifiques et techniques à caractère politiques* (以下、DSTP)」¹⁾を研究の対象とする。このようなディスコースは、とりわけ健康や食品、環境等の社会的事象が問題となる際、わたしたちの日常生活と密接に関係するがゆえに、読者の気をもませたり、引きつけたりといった機能をもつ (Moirand, 2005; 82より一部変更)²⁾。

1) DSTP の範疇には、物理学や天文学、生物学や心理学をめぐるディスコースなどの純粋に科学のみを対象とするものとは異なり、科学と政治が密接にかかわる事象をめぐるディスコースがあてはまる。つまり、これらの範疇には、「新型インフルエンザ」「重症急性呼吸器症候群 (SARS)」「ノロウイルス感染症」などの感染症にまつわるものや、「遺伝子組み換え食品」「狂牛病」などの食生活にかかわるもの、さらには「メタボリックシンドローム」「喫煙」などの生活習慣にかかわるものがあてはまる。

2) Il s'agit donc de faits qui, soudainement et/ou sporadiquement, donnent lieu à une vaste

一方、DSTPを対象とした研究は、パリ第3大学の日常的・専門的ディスコースの研究センター（Centre de recherche sur les discours ordinaires et spécialisés）にて、盛んにおこなわれている³⁾。ここでの研究では、主に科学の未知性にスポットライトが当てられており、ゆえにそれらの研究では、DSTPにおける「科学」の一側面しか取り扱われていない。そこで、本論文では、科学には未知性だけでなく、既知性をともなう事象も存在することを考慮に入れ、研究を進める。

本章では、1.1でDSTPにおける「科学」のもつ未知性や既知性を見出しながら、「科学的ディスコースの確実・不確実尺度」を設定する。つづく1.2で本論文の問題を提示し、1.3で本論文の概要を記す。

1.1 「科学的ディスコースの確実・不確実尺度」

ここでは、DSTPにおける「科学」に関して、「確実－不確実尺度」の導入を試みる。

1.1.1 科学的に不確実なディスコース

科学的に不確実なディスコースとは、「**予防原則 Le principe de précaution**」という概念と密接にかかわる。「予防原則」とは、1970年代からドイツで使用されはじめた用語（Vorsorgeprinzip）で、1992年にリオデジャネイロで開催された「環境と開発に関する国連会議」（通称：「地球サミット」）の合意宣言である「アジェンダ21」に盛り込まれたことから急速に知られるようになった概念である⁴⁾。「予防原則」については論

production discursive dans les médias — ce qu'on a appelé un «moment discursif» —, parce qu'ils sont nature à inquiéter, donc à attirer lecteurs et spectateurs, quel qu'ils soient, dans la mesure où il s'agit de faits de société qui touchent à la santé, à l'alimentation et à l'environnement.

3) 詳しくは、<http://www.cavi.univ-paris3.fr/ilpga/syled/cediscor.htm> を参照のこと。

4) この際に提示された予防原則の定義は次の通りである。「環境を防衛するため、各国はその能力に応じて予防措置（des mesures de précaution）を広く講じなければ

者たちの立場を反映し、さまざまな定義が試みられているが、こうした諸処の立場を総合して、吉岡（2003）は以下のように最大公約数的な定義を試みている。

「人の生命・健康や自然環境に対して大きな悪影響を及ぼす可能性が懸念されている物質や活動について、たとえその悪影響に対する科学的な解明が不十分であっても、すべての関係者は十分な防護対策を実施すべきであるという思想をめざすもの。」

吉岡（2003）

ここで「大きな悪影響を及ぼす可能性が懸念されている物質や活動」には、遺伝子組み換え食品や狂牛病が該当する。予防原則の適応対象として該当する事象とは、その危険性が十分に証明されていない状況にあり、それらを対象に科学者によって構成されたディスコースは科学的に「不確実性」を含みもつといえる。

1.1.2 科学的に確実なディスコース

予防原則に隣接する概念として、「**防止原則 le principe de prévention**」があげられる。その定義は、「科学的に特定された因果関係・予見可能性・相当の注意義務といった要素から成り、その違反に対しては国家責任法が適用される（藤岡 2005）」というものである。たとえば喫煙依存症の問題や、アスベストの問題などがここにあてはまる。防止原則が適応される事項は、その原則を適応すべき対象の危険性が科学的に「特定された」ものであり、対象のもたらす健康被害が、確実であると証明された段階にあるがゆえに、科学的に「**確実性**」をもつといえる。

ならない。重大あるいは取り返しのつかない損害の恐れがあるところでは、十分な科学的確実性がないことを、環境悪化を防ぐ費用対効果の高い対策を引き伸ばす理由にしてはならない」（Nations Unies, 1992）

1.1.3 「確実」と「不確実」の尺度設定に向けて

ここまでは、科学的に確実なディスコースと不確実なディスコースの性質を提示した。ここで強調しておきたいのは、科学者によって危険の解明がおこなわれているすべての物質／事象は「確実」か「不確実」かのどちらかに割り当てられるものではない、ということである。たとえば、たばこの場合には、それがもたらす健康被害はより確実ではある。つまりたばこをめぐって構成されるディスコースは確実な性質を帯びている。しかし、たばこは、覚せい剤や毒物のような接種すると死に至りかねないに物質に比べ、科学的に不確実な性質を含んでいるといえる。確実と不確実の中間的な事例として、メタボリックシンドロームがあげられる。この問題については、高血圧や糖尿病などの生活習慣病がそれぞれが独立した別の病気ではなく、肥満が原因であることがわかってきており、「特定健康診査」の義務付けも実施されているが、その病態については十分に明らかになっていないとの報告（前田, 2006）もなされており、確実性を含みつつも、その不確実性は喫煙依存症等のたばこにまつわる健康被害に比べ、大きい。さらに、後の分析で取り上げる携帯電話の放つ電磁波をめぐるとの問題では、研究は現在進行中であり、危険性が確実であるという主張は皆無に等しい。そのため、ディスコースは多くの不確実性を身にまとっている。

このように、物質／事象に応じて確実性－不確実性の度合いはさまざまであり、そして両者は（常に）入り混じる関係にあるといえる。こうして、科学的ディスコースに関し、その確実さの度合いに応じるかたちで尺度を設定できるだろう。この尺度を「科学的ディスコースの確実・不確実尺度」と命名しておきたい。尺度の詳細については1.1.4で述べる。

1.1.4 まとめ

1.1.3では、「確実」と「不確実」の中間的な事例を提示することで、「科学的ディスコースの確実・不確実尺度」の提示を試みた。そして図1

にみるように、この尺度において、確実と不確実の間は程度問題となり、その間のどの地点にも確実性の度合いが与えられるような連続性の論理が存在するものとする。

確実 ————— 不確実

図1 「確実」と「不確実」の連続性

図1のような図式を設定すれば、科学的に確実なものは、より左寄りに位置し、科学的に不確実なものは、より右側に位置するものであるといえる。しかしながら、科学が進歩するにつれて、現段階で「不確実」な領域に属するものは「確実」の方向に移動する可能性があり得るし、その逆も然りである。つまり、本章で取り扱うディスコースは、「現時点」で確実寄り、あるいは不確実寄りにあるものである。しかしながら、本論文で明らかにしたいことは、1.2に示すように、ディスコースが普遍的にみせる特徴であることをここで強調しておきたい。

1.2 問題提起

以上で見たように、予防原則が適用される事象についてのディスコースを「科学的に不確実なディスコース」、防止原則についてのそれを「科学的に確実なディスコース」ととらえ、科学的知見に関するディスコースの構成の仕方に、それがあつかう事象の性質に応じて上記の2つのタイプがあることが、新聞記事における科学について書かれたディスコースにどのような差異をもたらしているのかについての研究を、本論文執筆者は多面的におこなっている。そこで明らかにしたいのは、次の通りである。

問題

科学にまつわるディスコースは、いかに確実性を獲得しているのだろうか。つまり、「たばこは健康を害する」などの、わたしたちがいまや科

学的根拠に基づくものとして自明視している諸処の信念は、どのようなディスコースの構築の上に成り立っているのだろうか、あるいは保たれているのだろうか。こうして科学の確実性がことばとともにいかに構築されているかについて問うてゆく。

この問題解決の一環として、本論文では、とりわけロシアの思想家、ミハイル・バフチン Mikhail Mikhailovich Bakhtine (以下、Bakhtine) によって提唱された対話性 **Dialogisme**⁵⁾ の概念のもとに、科学的に確実・不確実なディスコースの対話的構造について、比較をおこなうものとする。

1.3 本論文の概要

実際に観察・分析にとりかかるにあたり、第2章以降の内容について簡単にふれておく。

第2章「マスメディアにおける科学をめぐるディスコース」では、マスメディアにおける科学のディスコースの性質について検討する。

第3章「分析の対象」では、観察・分析の対象とするディスコースを提示し、それらの特徴について考える。

第4章「対話性理論 — Bakhtine から Moirand にかけて」では、はじめに Bakhtine によって提唱された対話性の概念の定義を提示する。その後、Bakhtine の対話性を基に、J. Authier-revuz (1985)、Moirand (1988) によって展開された対話性理論の発展を参照し、分析の道具を提示する。

第5章「分析 — 伝達される科学的知識の間テクスト的対話性」では、科学的に確実なディスコースと科学的に不確実なディスコースにおいて科学的知識の伝達がされる際の、対話的構造について検討し、両者の比較を試みる。

第6章「結論」では、第1章から第5章をまとめた上で、本論文の結論を提示する予定である。

5) 4章で説明する。

2. マスメディアにおける科学をめぐるディスコース

本論文の対象とする科学について生産されたマスメディアのディスコースとは、「科学者と大衆を媒介するディスコース」と言い換えることができる。つまり、科学者のコミュニティー内で日々生産される知識／ディスコースを大衆に向けて知らせるという性質を、マスメディアのディスコースは含意している。

Mortureux (1982; 3) は、専門家 *spécialistes* によって／専門家のために推敲される (すなわち「閉じた」) ディスコースを「第一次ディスコース **discours sources**」(以下、**D1**)、大衆に向けられた (すなわち「開かれた」) ディスコースを「第二次ディスコース **discours secondes**⁶⁾」(以下、**D2**) とする。本論文で研究対象であるマスメディアのディスコースは後者にあてはまる。

2.1 D1とD2の伝達の側面

D1とD2の伝達の側面に焦点をあてた場合、D1が生産される状況における参加者は、複数の専門家ということになる。専門家らは、論文の執筆や学会発表、学者内での討論等の活動を通し、「新たなる知識」を日々生産してゆく。しかしながら、D2においては状況が異なる。D1が大衆に開かれる際、科学者と大衆の間の架け橋として、媒介者 *mediateur* がディスコースの伝達に加わることとなる。つまりそこには、少なくとも「科学者」・「媒介者」・「大衆」の3者が参与する。そしてこの3者が保持する科学的な知識は、つねに不均等な状況にあるといえる。「科学者」は話し手とはなりうるが、受け手にはなりえない。つまり、このような伝達の状況において、科学者はつねにD1の生産者である。それとは逆に、「大

6) Moirand (ibid., 78) は、第二次ディスコースの存在条件を次のように述べる。

Poser que les discours seconds sont dérivés d'un discours source présuppose que ce dernier existe et qu'il donne lieu à un continuum de discours dérivés plus ou moins proches de lui. Ce présupposé n'est pas sans conséquences sur les choix du chercheur.

衆」はもっぱら受け手としてそこに参与する。そこでの受け手は、一般に、ディスコースの生産者、発話者とはなりえない。

2.2 媒介者の役割

2.1では、D1とD2における参与者について言及した。D1の参与者は科学者に限られるのに対し、D2では少なくとも、「科学者」・「媒介者」・「大衆」の3者がディスコースに参与することを明示した。そして伝達の状況での「科学者」と「大衆」の役割についてみた。以上を念頭に置き、ここではD2における「媒介者」の役割についてみていく。

2.2.1 媒介者の役割①

媒介者は、「第三者 **troisième homme**」(Reboul-Touré, 2005; 197) や「**科学の世界と大衆の世界の間のディスコースの管理人 *gestionnaire discursif entre l'univers de la science et celui du publique***」(Moirand, 2005; 45) と言い換えられている。つまりディスコースの伝達の状況において、「科学者の保持する知識」と「大衆の保持する知識」の間に生じる距離を補うため、さまざまな活動をおこなう。たとえば媒介者は、「専門家ではない大衆」の間に生じうる問題に答え (Reboul-Touré, 2005; 197)、科学者による活動や発言について、補足や言い換え、説明などをおこない、大衆による科学的な知識の理解の増大につとめる役割を担う。

2.2.2 媒介者の役割②

マスメディアの科学についてのディスコースにおける媒介者のあり方は他にも存在する。

En effet, l'énonciateur de la vulgarisation n'est pas la seule voix qui se manifeste dans les articles. Sont entendues les réflexions de spécialistes, les opinions d'hommes politiques ou d'industriels, de témoins (Reboul-Touré

2000), lorsqu'on s'intéresse à la vulgarisation qui touche des problèmes de société [...]. (Reboul-Touré, 2005; 197-198)

実際のところ、記事の中に現れるのは、大衆化の発話行為者（すなわち媒介者⁷⁾）の声だけではない。とりわけ社会問題に触れる大衆化に関心を抱く際、記事の中には専門家による見解や、政界人または産業界の意見、第三者の意見が含まれる。科学的な話題の中には、大衆に議論されるようになるものもある。

ディスコースの話題が社会問題に移行するにあたり、三つどもえ（科学-媒介者-大衆）の状況は、複雑化する。つまり、そのようなディスコースはさまざまなコミュニティが参与し、多種多様な声が交差する場と化す⁸⁾。

このような伝達の状況における媒介者は、複数の「声」をあつかう役割を担うことから、「オーケストラの指揮者 **chef d'orchestre**」や、「複数の声の支配者 **arbitre d'une pluralité de voix**」(Moirand 2002; 45-46)と称される。

以上のことは、本論文での分析の対象である、マスメディアにおける科学についてのディスコースにおいて、科学者以外のコミュニティの参与する場が開かれていることを示唆している。さらに、伝達の状況を考慮に入れると、媒介者だけでなく、科学者と大衆がそれらのディスコースに参加するとの見方が可能になる。では、このようにより複雑化した伝達の状況のなかで、どのように「科学についてのディスコース」が構築されていくのだろうか。媒介者はディスコースの生産に際して、科

7) 本論文筆者による加筆

8) 同様に Wolton (1997b : 9) は、科学についてのマスメディアのディスコースへの参加者を次のように説明する。

«Au moins *quatre*, la science, la politique, la communication et les publiques ; et chacun est lui-même souvent divisé en plusieurs sous-groups.»

学者や大衆をいかにディスコースに取り込むのだろうか。以上を観察・分析に際しての着目点のひとつとして提示しておきたい。

3. 分析の対象

第1章で、本論文の目的について明示した。そこで掲げた2つの問題点を検討するにあたり、本章では、観察・分析で取り扱う新聞記事を示す。

3.1では、分析で取り扱う新聞について明示する。次に3.2では、取り扱うディスコースの特徴について簡潔に述べる。最後に3.3でまとめる。

3.1 分析で扱う新聞記事

観察・分析では、フランスの日常紙である『ル・フィガロ』(*Le Figaro*)、『ル・モンド』(*Le Monde*)を参照する。これらは発行部数の多い全国紙であり、社会に影響を与え、世論を作り出す力をもちえるものといえる(高馬, 2008)。さらに以上の2紙に加え、本論文筆者がデータを収集する過程で、豊富な科学をめぐる記事にあたった『リベラシオン』(*Liberation*)も対象に入れる。

また、科学的に確実なディスコースについては、たばこ(喫煙/禁煙)に関する記事(以下、たばこのディスコース)を、科学的に不確実なディスコースについては、携帯電話の使用/携帯電話のアンテナへの接近による健康上の問題に関する記事(以下、携帯電話のディスコース)を観察・分析の対象とする。1.1.3で展開したように、たばこのディスコースは図1の尺度でより左側に位置し、携帯電話のそれはより右側に位置するといえる。「確実」なものと「不確実」なものを比較する際には、メタボリックシンドロームなどの中間的な事例をとりあげるよりも、多くの確実性/不確実性をもつディスコースを対象とするほうが、確実性と不確実性の違いが明確化できるように思われる。

参照する記事の期間は、2000年から2008年にかけて発行された記事を対象とする。方法としては、事例研究を通し、ディスコースのあり方を

詳細に観察⁹⁾する。その後、観察をもとに適宜理論を導入し、分析をおこなう。

3.2では、観察・分析で対象とする携帯電話のディスコースとたばこのディスコースの性質について記述する。

3.2 たばこと携帯電話をめぐるディスコースの性質

観察と分析では、3.1で示したように、確実な科学的ディスコースの代表例として、たばこのディスコース、不確実な科学的ディスコースとして、携帯電話のディスコースを扱う。ここでは、第1章で設定した科学的ディスコースの確実・不確実尺度を下敷きとし、これらのディスコースの性質について述べる。とりわけ、ディスコースが大衆の日常にどのような影響を与えているかに焦点をあてる。

3.2.1 たばこのディスコースの特徴

「たばこは害」という命題は、国境を越えて、誰もが疑う余地のない「事実」としてのステイタスを確立しているといっても過言ではなからう。その根拠として、現代社会において盛んに行われている嫌煙運動を例にとり、説明をすることが可能である。たとえば、公共の場での禁煙場所は拡大され、分煙運動の実施は瞬く間に広がり、たばこの値上げが、現段階で検討されている。さらに、たばこのパッケージには、喫煙に対する警告文が存在する。そしてこれらの方策が政治レベルで実施されること対し、大衆の大部分は、何の疑問や違和感を抱くことなく、それに従う。その行為を根底から支えているものこそ、科学的な確実性、すなわち科学的な根拠であり、大衆の間でのその根拠の認知度の高さであるといえよう。

すなわち、たばこについての科学的実証をもとに構成されているディスコースは、科学者の間で生産されるにとどまるのではない。そのよう

9) 「観察とは、研究の中で最も重要な過程である」(Moirand, 個人談話)

な研究の成果は、**科学者のコミュニティーを超え**、大衆に対して大きな影響力をもつものとして捉えることができる。

3.2.2 携帯電話のディスコースの特徴

携帯電話の危険性をめぐる研究は、現在日本を含め、ヨーロッパを中心に世界各国でなされている。日本のマスメディアでこの話題を見受けることは、今となつては皆無に等しいが、フランスのマスメディア場面においては、携帯電話の危険性について、何らかの報告が科学者らによってなされる度に、この話題は紙面上を踊っている。

3.2.1で、たばこについては、政治レベルでの方策が施行されている点について言及したが、携帯電話についてもそのような事柄が、実施されていることは確かである。しかしながら、携帯電話に対してとられる（時に政治的な）行為は、たばこのそれとは異質である。たとえば、携帯電話の使用についての警告文は、一般的に次のようなものである。

1. Ne pas autoriser les enfants de moins de 12 ans à utiliser un téléphone portable **sauf en cas d'urgence**. [...]
 2. Lors des communications, essayer **autant que possible** de maintenir le téléphone à plus d'1 m du corps. Utiliser **dés que possible** le mode "haut-parleur".
 3. **N'utiliser son téléphone portable que pour établir le contact ou pour des conversations de quelques minutes seulement.**
 4. **Pendant les communications**, changer de côté régulièrement.
- LEXPRESS*, 16/06/2008 à 11: 57 – publié, 16/06/2008 (より一部変更)

1. 緊急の場合を除いては、12歳以下の子供に携帯電話の使用を許可しない
2. 通話中は、**可能な限り**携帯電話から体を1メートル以上離しておくようにすること。**できるだけ『スピーカーホン』モードを**

用いること。

3. 連絡をとる時や、ほんの数分の会話の際以外は携帯電話を使用しない。
4. **通話中**は、規則的にもつ手を変えること。

太字部分に示されているように、携帯電話の警告文が唱えていることは、完全なる禁止ではなく、「可能な限り使用を控えること」である。つまり、たばこは異なり、実質的にはその使用が認められている。このような状況において、一連の携帯電話に関する報道を目の当たりにする大衆は、携帯電話の使用を控えるように促されているのだが、それは政治レベルで決定された法律的に守らねばならない事柄ではなく、あくまで個人レベルで実行すべき事項である。そして、たばこ携帯電話について実行すべき事柄の厳密さを分けているものこそ、**科学的な確実さの度合い**であるといえる。つまり、携帯電話のもつ危険性についての確定的な結果は、未だ科学者らによってもたらされていないため、完全にその使用を禁ずることができていない。

3.3 まとめ

3.1では、観察・分析で参照する記事を明示した。つづく3.2では、科学的に確実なディスコースの代表例としてとりあげる「たばこのディスコース」と、科学的に不確実なその代表例である「携帯電話のディスコース」の性質について検討した。ここでは、科学的な実証が大衆の日常にどのような影響をもたらすのかについて、検討をおこなった。結果、たばこの場合には、科学的な根拠をもとに喫煙／喫煙に関してさまざまに方策がとられ、科学的実証は大衆の日常に影響力を持つことが明らかになった。それに対し、携帯電話の場合には科学的な証拠に乏しいがゆえに、携帯電話の使用に関する警告文を実行に移すか否かについての決定は個人に託されていることについてみた。

4. 対話性理論 — Bakhtine から Moirand にかけて

先に示したように観察・分析では、携帯電話とたばこのディスコースの対話的構造についてみてゆく。この分析に欠くことのできない概念として、「対話性 dialogisme」があげられる。本章では、4.1で、対話性の概念を提唱した Bakhtine の主張を紹介する。続いて4.2では、ディスコースを通して何らかの知識が伝達される際の、対話性の性質について Moirand (1988) を参照し、分析に向けて、道具立てを明確化する。最後に4.3では、観察・分析での焦点を示す。

4.1 Bakhtine による「対話性」

Bakhtine (1895-1975) は、コミュニケーションを構成する要素として、①発話のジャンル、②発話の中でてくる「対象」、③発話する「語りの主体」、④能動的に参加する「聞き手、読み手」、⑤発話に先行、後続する「他の発話」をあげている（メイナード、1997より一部変更）。そしてディスコースとは、上に列挙した声のみならず、そのディスコースを生んだ文化や社会の声との対話を通し、構成されているという見解を示す。つまり、あらゆる言語使用には、常に複数の声が混ざり、響いているため、多重性が認められることとなる。

そして、Bakhtine が提唱した「対話性 dialogisme」とは、上のメイナードの引用の中で、主に⑤の要素を反映したものであるといえる。その定義は、Todorov (1981, 9)、Moirand (2000, 175) によると、「すべての発話が、それ以前に生産された発話や、その発話の受け手によって未来に生産されるであろう発話とともに維持する関係」を示すものであるとされる。つまり、ひとつの発話（現在の声）は、それに先行する発話（過去の声）との対話を通して生産され、さらに現在の声は未来に生じるであろう発話（未来の声）へと繋がるのである。そして、この定義にしたがえば、われわれがおこなう「発話」には、つねに2重の対話がともなっていることになる。一方はある対象について過去に発せられた発話との対話、もう一方はその受け手によって未来に生産されるであろう発話

との対話である。

分析ではこの概念をもとに、たばこ携帯電話のディスコースを通して伝達される科学的な知識の時間的な広がりや、いかに示されるかに焦点をあて、「たばこ携帯電話のもつ危険性について過去に構築されたディスコース」と「観察・分析の対象とするディスコース」との対話 **dialogue** のあり方について検討する。さらに、未来に形成されるであろう両者のディスコースの可能性についても探っていく。

4.2 Moirand による「間テクスト的対話性¹⁰⁾」と「相互作用的対話性」

ディスコース分析の領域において、バフチンの言語理論を下敷きとした研究は、ヨーロッパやアメリカを中心に盛んである。中でも、Moirand (1988 ; 309-310, 457-458) は、諸処の知識を伝達するディスコースを記述する必要性から、示された対話性 **dialogisme montré**¹¹⁾ に「間テクスト

10) 「間テクスト性 Intertextualité」という用語は、ジュリア・クリステヴァ Julia Kristeva が Bakhtine の理論をフランスに紹介する際に用いた用語である (Todorov, 1981; 95)。Bakhtine による対話性の概念は、先述したように、発話の「過去」と「未来」を考慮に入れているのに対し、間テクスト性の概念は、「過去の発話と現行の発話との関係性」のみを考慮に入れたものである。

11) J. Authier-revuz (1985 : 118) は、対話性の形跡がディスコース上に示されるか (示された対話性)、その形跡がディスコースのさまざまな構成要素の背後に隠れ、示されないか (構成的対話性) という規準のもとに、対話性について次のような区分を与えている。

Face au dialogisme constitutif, qui se cache ou se masque derrière les mot, les construction syntaxiques, les reformulations ou les réécritures non dit des discours seconds, «tout autre est le niveau du dialogisme “montré”, c’est-à-dire de la représentation qu’un discours donne en lui-même de son rapport à l’autre, de la place qu’il lui fait, explicitement, en désignant dans la chaîne, au moyen d’un ensemble de marques linguistique, des points d’hétérogénéité».

本文に挙げている示されたディアロジスムとは、「あるディスコースとその他のディスコースとの関係」や、「あるディスコースがその他のディスコースとの関係の中でおかれている位置」などの、「あるディスコースがそのディスコースそ

「対話性 dialogisme intertextuel」と「相互作用的对話性 dialogisme interactionnel」という2つの区別をもうけている。その定義を以下に示す。

Deux formes de dialogisme montré : celle qui fait explicitement référence à des discours antérieurs, des discours sources ou des discours premiers, et celle qui fait explicitement référence aux discours que l'on prête aux destinataires. (Moirand, 1988)

示された対話性の2つの形式：先行するディスコースやD1、一次的ディスコースを明示的に参照する形式（間テキスト的对話性）と、受け手のものだとするディスコースを明示的に参照する形式（相互作用的对話性）。

前者は間テキスト的对話性を指す。この概念により、知識を伝達するディスコースには、そのディスコースを通して提示されている知識がいつ、どこで、誰によって生産されたのかが示される性質がとらえられている。必然的に、ディスコースに示される知識とは、そのディスコースが生産される時点よりも過去に構築されたものである。よって、間テキスト的对話性が示されるディスコースとは、過去に生産されたディスコースとの対話を通して実現されているものとしてとらえることができる。そして、上の定義のうち、後者は相互作用的对話性を指す。ここでは、知識を伝達するディスコースが、その受け手の保持する知識の状態に見合ったかたちで知識を提示する性質をとらえている。すなわち、このようなディスコースでは「媒介者-受け手」間での対話が発生していることとなる。

のものにあたえている表象」が、まさにディスコース上に示されることをいう。

4.3 分析に向けて

分析では、携帯電話とたばこのディスコースにおいて伝達される知識の、過去から現在にかけての時間的な広がりについて分析を進めていくことから、両者のディスコースにみられる間テクスト的対話性の性質に着目する。そして分析の対象とするディスコースが、それに先行するディスコースとのいかなる対話関係にあるのか、さらにそのような対話関係がいかに具体的なディスコースに示されているのかについて検討する。

同時に、携帯電話やたばこの危険性について現時点で構築されている知識が、未来に向けて広がりを見せる可能性というものが、ディスコース上にどのように示されているのかについても概観し、知識の「過去－現在－未来」間での持続性の性質について検討を加える。

5. 分析 — 伝達される科学的知識の間テクスト的対話性

本章では、携帯電話とたばこのディスコースの間テクスト的対話性について、両者の比較を試みる。

5.1 たばこの場合

ここでは、観察・分析の対象であるたばこについて書かれたディスコースにおいて、たばこについての過去に構成されたディスコースがどのように示されているかについてみていく。さらに、未来に構成されるであろうディスコースの可能性についても探っていく。

記事 1

Dès 1958, il a été établi que le tabac est cancérigène et dès 1962, que la dépendance est due à la nicotine, drogue puissante.

Depuis plus de 20 ans, les professionnels de santé n'ont eu de cesse d'alerter les pouvoirs publics sur les conséquences dramatiques du tabagisme qui favorise tous les cancers et est également responsable de maladies cardiovasculaires.

[Le Figaro, 15 octobre 2003]

1958年においてすでに、たばこに発がん性があることが証明されており、1962年にはたばこへの依存は強力な麻薬であるニコチンに原因があることが明らかにされている。

20年以上前から、すべての癌を助長し、心血管関係の病気の原因になる喫煙依存症の劇的な影響について、健康の専門家たちは、行政当局に対して絶えず警告を続けてきた。

記事 2

«Le tabac pourrait faire un milliard de morts au cours de ce siècle à travers le monde si les gouvernements et les sociétés civiles n'agissent pas rapidement pour en réduire l'usage», affirme un rapport de l'Organisation mondiale de la santé (OMS) [...]. Au XX^e siècle, le tabac aurait été responsable dans le monde de 100 millions de décès. «Si rien n'est fait, le nombre des décès liés au tabagisme atteindra plus de huit millions par an d'ici à 2030 et 80 % de ces cas se produiront dans les pays en développement», poursuit le document.

[Le Figaro, 09 février 2008]

「もしも各国の政府や市民社会がたばこの消費を減らすため、すみやかに行動を起こさなければ、たばこは今世紀中に世界で10億の死をもたらしつかもれない。」と世界保健機関（WHO）は報告書で明言している。**【中略】**20世紀中に、たばこは世界で一億の死の原因となった可能性がある。「もしなにもしなければ、喫煙依存症による死者の数は今後2030年までに800万人以上に達し、そのうちの80%は途上国で起こるでしょう」と文書は続けている。

たばこのディスコース通して示される過去の声とは、後に検討する携

帯電話のそれとは異なり、現在において科学者の間で構築されたディスコースではなく、それよりも長い時間を通して流布しているとみなすことのできる科学者の声を参照している（記事1：«**Dès 1958, il a été établi que le tabac est cancérigène et dès 1962, que la dépendance est due à la nicotine, drogue puissante.**», 記事2：«**Au XX^e siècle, le tabac aurait été responsable dans le monde de 100 millions de décès.**»）。

たとえば記事1では、たばこに関する科学的知識が、過去にすでに確立されたものとして示され、それらの知識は今なお存在し続けているさまが書き込まれている（«**Dès 1958, [...]., «dès 1962, [...]., «Depuis plus de 20 ans, [...].»**）。つまりたばこについての科学的な知識が、過去から現在にかけて一貫しているさまが示されている。そして記事2では、過去におけるたばこについての科学的な事実（«**Au XX^e siècle, le tabac aurait été responsable dans le monde de 100 millions de décès.**»）を前置きとし、その過去の声が現在に生き続け、そして未来においてもその声が存在し続けうることが示されている（«**[...] le nombre des décès liés au tabagisme atteindra plus de huit millions par an d'ici à 2030 [...].»**）。つまりここでは、過去に生産されたたばこについてのディスコースが、現状を説明するため、そして未来を予測するための手段となっており、「過去－現在－未来」間で科学的な知識が一貫しているさまが伝達されている。同様の例を以下にあげる。

- “**Le tabac a tué 100 millions de personnes à travers le monde au XX^e siècle et en tuera un milliard au XXI^e siècle si les tendances actuelles se poursuivent**”, résumant les auteurs d’un rapport consacré à “l’épidémie” mondiale de tabagisme, rendu public début février par l’Organisation mondiale de la santé (OMS). [*Le Monde*, 15 février 2008]

「たばこは20世紀の間に世界で一億人の命を奪った。そして現在の

傾向が続けば、21世紀には10億の死が招かれるだろう」。世界保健機関（WHO）が2月上旬に発表した、喫煙依存症の世界的な「蔓延」についての報告書の筆者たちは、以上のように概括している。

- Selon l'OMS, le nombre de décès dans le monde dû au tabac **passera de 4 millions par an en 1998 à 10 millions en 2030**, dont 70 % dans les pays en développement. [*Libération*, 09 août 2000]

世界保健機関（WHO）によると、世界でのたばこによる死者の総数は1998年では一年間で400万人であったが、2030年には年間で1000万人となり、そのうちの70%は途上国で起こるだろうとのことである。

このように、たばこについての科学的な知識を伝達するディスコースには、前もって存在するたばこについてのディスコースが、その内容面において変形することなく引き継がれている。さらに先行するディスコースをよりどころとし、現在そして未来のディスコースが構築されている。つまりたばこのディスコースでは、過去の声に逆らわないかたちで（つまり過去の声に同意するかたちで）科学的な知識が伝達されている。

5.2 携帯電話の場合

携帯電話を通して伝達される科学的知識は、現時点で科学者によってなされている携帯電話についての研究の成果の状況の報告に従事しているようにみえる。

記事3

A la Direction générale de la santé, on se borne à répéter qu'il s'agit seulement d'un "rappel des mises en garde concernant les enfants" et qu'on attend les résultats des études en cours. En 2001, l'OMS a lancé le

programme Interphone, sur le risque de cancers que pourrait représenter l'usage des téléphones mobiles. [...] Pour l'instant, la plupart des études d'Interphone n'ont pas découvert de liens statistiques entre l'usage du téléphone mobile et la survenue de cancers.

[*Libération*, 04 janvier 2008]

公衆衛生担当総局では、「こどもに関する注意喚起の再警告」だけが問題であること、そして現在進行中の研究の結果を待っているのだということをしを繰り返すにとどまっている。2001年に世界保健機関（WHO）は携帯電話の使用がもたらしうる癌の危険性についてのインターフォン計画を開始した。[...]今のところ、インターフォンの研究の大部分は、携帯電話の使用と癌の発生のあいだに統計上の結びつきがあることを発見していない。

記事 4

En ce qui concerne la dangerosité des rayons émis par les téléphones mobiles et celle des ondes émises par les stations relais, les recherches, pour l'heure, ne sont pas concluantes, explique l'AFSSE. Mais il faut rester «vigilant» précise l'avis car «bien que l'essentiel des études épidémiologiques déjà publiées tende à réfuter l'existence d'un risque de cancer du cerveau ou d'autres formes de cette maladie chez l'homme, le recul disponible à ce jour n'est pas suffisant pour exclure cette hypothèse».

[*Le Figaro*, 23 juin 2005]

携帯電話が発する電磁波の危険性と中継局が発する電波の危険性に関して、現在のところ、決定的な研究成果は出されていないとフランス環境衛生安全局は説明する。しかし、フランス環境衛生安全局の通達が明記するところによれば、「警戒」をおこたってはならない。というのも、「公表済みの疫学的研究の大部分は、脳腫瘍や他の癌の危険性の存在を否

定する傾向にあるものの、現在のところ、この仮説を排除するために十分な時間的隔たりがおかれていない」。

ここでは、科学者のコミュニティーの中でおこなわれている研究の「現在」の状況が、次の括弧内に示す言語表現をともない、記述されている（記事3: «les résultats des études **en cours** […].», «**Pour l’instant** […]» 記事4: «les recherches, **pour l’heure**, ne sont pas concluantes.», «le recul disponible **à ce jour** n’est pas suffisant […].»).そして、ディスコース上に示される科学的なデータは、明示的に、科学者のコミュニティーの中で生産されたディスコース (D1) から引き継がれているさまが見受けられる（記事3 «la plupart des études d’**Interphone**¹²⁾ […].», 記事4: «l’essentiel des études **épidémiologiques déjà publiées** […].»).

このように、携帯電話のディスコースを通して科学的な知識が伝達される際、そこでは現段階において科学者が生産したディスコースの形跡が目あたりにできる。つまり携帯電話のディスコースにおいて示される過去の声は、おもにD1を参照しているのだが、それらは終始「今」のディスコースとして扱われている。よってこのような記述からは、携帯電話についての科学的な知識の「過去－現在」の関係性をうかがい知ることができない。すなわち携帯電話の科学的な知識を伝達するディスコースは、知識の未来への広がりの可能性を示すどころか、科学者間で「過去」に構成された知識との継続性・一貫性ももたず、あくまで「その場かぎり」の知識の構成に従事している。そしてこのようなディスコースは、知識の伝達の間というよりもむしろ、科学の現状の位置決定の間となっているようにみえる。

12) これは、ヨーロッパを中心に13か国（オーストリア、カナダ、デンマーク、フィンランド、フランス、ドイツ、イスラエル、イタリア、日本、ニュージーランド、ノルウェー、スウェーデン、イギリス）が連携し、WHO（世界保健機構）によって指揮された共同研究。

5.3 まとめ — 間テクスト的ディアロジスムの再考 —

はじめに、これまでおこなってきた観察・分析をまとめる。続いて、携帯電話とたばこのディスコースにおいて示されている間テクスト的対話性について検討し、この概念に新たな水準を加えてゆく。

たばこのディスコースにおける科学的な知識とは、第一に、長期にわたって流布しているものとしての、たばこにまつわる過去の声を明示的に参照している。それと同時に、それらの過去の声そのものが現在の知識として伝達されている。そして第二に、過去の声が現在の状況を報告する手段となっているだけにとどまらず、未来の知識の生産の基盤となっている。つまり「過去－現在－未来」間で、知識が一貫しているさまが示されている。

それに対し、携帯電話のディスコースにおける科学的な知識とは、「現時点」で科学者のコミュニティーの中でなされている研究の成果を参照しているがゆえに、ディスコースが「現在」の状況の記述に没頭していることについてみた。

ここから、両者のディスコース上に示される科学的知識には、歴史の刻み込まれかたに違いがあることがわかる。というのも、先に述べたように、携帯電話の場合に伝達される知識とは、基本的に現段階で公表されているD1をよりどころとしているのに対し、たばこの場合には、数十年間にわたって流布している過去の声がディスコース上に立ちあらわれている。つまり、たばこのディスコースを通して示される間テクスト的対話性とは、携帯電話のそれに比べ、時間的に先行するディスコースとの強い結束性をもっている（強間テクスト的対話性）。それに対し、携帯電話のディスコースが間テクスト的対話性の性質を帯びていることは、D1を明示的に参照しているがゆえに認められるのだが、それらの記述は「現在」に向けられているがゆえに、たばこの場合に比べて知識の時間的な継続性を欠いているため、その性質は弱いといえる（弱間テクスト的対話性）。以上のような両者のディスコースの比較から、間テクスト的対

話性にたいして「強-弱」の水準を設けることができる¹³⁾。さらに、このような水準は「過去-現在」間だけではなく、未来に向けてのディスコース構成にも影響しうるものであるとの見方ができる。たばこのディスコースがもつ間テクスト的対話性の「強さ」とは、5.1でみたように、未来に生産されるであろうディスコースにもある一定の束縛を与えうるといえる。それに対し、「弱い」間テクスト的対話性をその性質にもつ携帯電話のディスコースとは、未来に生じうるディスコースに見当がつかないものである。つまり現時点において、未来のディスコースは何の束縛もないと同時に、今後ディスコースがどのような方向性を持って発展していくのかもわからない。そのような意味において、携帯電話のディスコースは路頭に迷っているのである。

6. 結論

ここでは、第1章から第5章の内容をまとめ、本論文の結論を述べてゆく。

第1章では、DSTPにおける「科学」に、「科学的ディスコースの確実・不確実尺度」の導入をおこない、本研究の基盤を示した。そしてこの尺度をもとに、科学的に確実なディスコースと科学的に不確実なそれとを比較することで、科学の確実さや、科学の進歩について問うてゆくことを問題とし、本論文では、主に Bakhtine によって提唱された対話性の概念をもとにそれらの問題を紐解いていくこととした。

第2章では、本論文での観察・分析の対象である、マスメディアにおける科学をめぐるディスコースの性質について概観した。D1とD2の伝達の側面について概観したのち、D2の参与者である「媒介者」の役割に着目し検討した。2.2.1では、第三者としての役割、そして科学者と大衆

13) たとえば、わたしたちがおこなう諸研究とは、過去の遺産（強間テクスト的対話性）に、現在の議論（弱間テクスト的対話性）が加えられ、そこから未来への展望や過去の遺産の見直しを開こうという構造があるようにみえる。

の間で生じる知識水準の距離を補うものとしての役割を媒介者にみた。さらに2.2.2では、D2に複数のコミュニティー（科学界、政界、産業界、経済界、世論など）が参与することにより、媒介者は複数の発話をあつかい、まとめていくことを役割として持つことをみた。

つづく、第3章と第4章では、分析をおこなうにあたり、そこで取り扱う記事や、対話性の理論の紹介をおこなった。

そして第5章ではMoirandによる間テキスト的対話性の概念をもとに、両者のディスコースの対話性について観察・分析をおこなった。そして分析の結果から、間テキスト的対話性に対し、「強－弱」の水準を設けた。

このような分析の結果から見ると、科学の確実性には「時間」という概念が関連しているように見える。すなわち、あるディスコースが長期的に存在し、伝播していることが、実体的にディスコースに現れることで、ディスコースの持続性が示されるということが、科学の確実性を支える論証的な役割を果たしているように思われる。

主要参考文献

- Authier-Revuz, J. 1985. «Dialogisme et vulgarisation scientifique.» *DISCOSS 1. Actes du colloque Discours contrastif-Sciences et Sociétés*, 14-16 mars 1985. Paris, 117-22.
- Bakhtine, M. 1997. *Le marxisme et la philosophie du langage*, preface de Roman Jakobson. Paris: Minuit.
- Beacco, J.-C. 2000. «Ecriture de la science dans les médias.» *Les carnets du Cediscor*, 15-24.
- Gergen, K. 1999. *An invitation to social construction*. London: Sage Publication. (東村知子訳. 2004. 『あなたへの社会構成主義』ナカニシヤ出版.)
- Moirand, S. 1988. *Une histoire de discours..., Une analyse des discours de la revue Le français dans le monde 1961-1981*. Paris: Hachette.
- Moirand, S. 1997. «Formes discursives de la diffusion des savoirs dans les médias.» *Hermès 21*. Paris: CNRS Editions, 33-44.
- Moirand, S. 1999. «Les indices dialogiques de contextualisation dans les discours sur la science dans la presse ordinaire.» *Cahiers de praxématique*, 145-184.

- Moirand, S. 2000. «Variations discursives dans deux situations contrastées de la presse ordinaire.» *Les carnets du Cediscor*. Paris: Presses de la Sorbonne Nouvelle, 45-62.
- Moirand, S. 2004. «Le dialogisme, entre problématiques énonciatives et théories discursives.» *Cahiers de praxématique*, 189-220.
- Moirand, S. 2005. «De la médiation à la médiatisation des faits scientifiques et techniques : où en est l'analyse du discours ?» Texte téléchargeable : http://sciences-medias.ens-lsh.fr/article.php?id_article=59.
- Moirand, S. 2007a. *Les discours de la presse quotidienne. Observer, analyser, comprendre*. Paris : Presses universitaires de France.
- Moirand, S. 2007b. «Un modèle dialogique de l'explication.» *L'explication: enjeux cognitifs et communicationnels*. Actes du colloque de l'université Paris 5 (novembre 2001 à paraître).
- Reboul-Touré, S. 2005. «Ecrire la vulgarisation scientifique aujourd'hui.» Texte téléchargeable: http://sciences-medias.ens-lsh.fr/article.php?id_article=65.
- Todorov, T. 1981. *Mikhaïl Bakhtine, le principe dialogique, suivi de Ecrits du Cercle de Bakhtine*. Paris: Seuil.
- Wolton, D. 1997. «De la vulgarisation à la communication.» *Hermès* 21. Paris: CNRS Editions, 9-14.
- 出口由美. 2008. 「『禁煙』をうながすディスコースの特徴」『関西大学千里山論文集』80, 73-97.
- 高馬京子. 2008. 『日本とフランスにおける日本人ファッションデザイナーの表象 — 日仏新聞記事(1981-1992)の言説分析を通して —』関西学院大学出版会.
- 前田朝美. 2006. 「メタボリックシンドロームの病態」『医療情報誌 animus』44. 三菱化学メディエンス株式会社.
- ミハイル・バフチン. 1995. 『ドフトエフスキーの詩学』ちくま学芸文庫.
- 泉子・K・メイナード. 1997. 『談話分析の可能性』くろしお出版.
- 鈴木聡志. 2007. 『ワールドマップ 会話分析・ディスコース分析 — ことばの織りなす世界を読み解く —』新曜社.